



Title	近世日本における仏教者のキリスト教理解：鈴木正三と雪窓宗崔の排耶書比較を中心にして
Author(s)	加藤，均
Citation	日本語・日本文化. 2013, 40, p. 55-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50780
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

近世日本における仏教者のキリスト教理解 ——鈴木正三と雪窓宗崔の排耶書比較を中心にして——

加藤 均

1. はじめに

十七世紀前半、江戸幕府のキリシタン禁制策が徹底される中、「仏教界は反キリシタン運動を通して、ようやく生氣を取り戻し、幕府への奉仕者としての存在意義を示すようになってくる」（海老沢 1970、p. 602）。そこで登場するのが仏教僧の鈴木正三（1579–1655）と雪窓宗崔（1589–1649）である。正三は、『二人比丘尼』、『念仏草子』等の仮名法語の作家として、また、世法即仏法を標榜し、士農工商がそれぞれの職分を尽くすことが仏道に他ならないとする職業倫理（職分仏行説）の提唱者として知られる人物であり、寛永十九（1642）年、島原の乱後に天草の代官となった弟の重成の求めに応じてかの地に赴き布教に努める中、キリシタン批判の書『破吉利支丹』（1642年頃成立、1662年版行）を執筆し、復興させた寺院に奉納する。一方、雪窓宗崔は臨済宗妙心寺派の僧で鈴木正三とは盟友であり、正保四（1647）年に幕府の要請により、長崎興福寺でキリシタン破斥の説法（『興福寺筆記』）を行い、翌年にキリシタン批判の書『対治邪執論』（1648年）を著述する。

両書はキリシタン史、仏教史、仏基交渉史など歴史研究の分野で重要な史料として位置づけられてきたが、もう一つ、キリスト教の勢力拡大に対抗して起こってきた明治二十年代の仏教側の排耶論への影響も論究すべき点であろう。正三の『破吉利支丹』については幕末になって版行された『新刻破鬼理死端』にもとづいて、明治二十二（1889）年に『校正新刻破鬼理死端』が刊行され、また幕府内で秘匿されてきたと言われる『対治邪執論』は明治二十六年（1893）刊の『破邪

叢書』(神崎一作編)に収録され、一般に知られるようになるからである。現下の問題意識は、近世初期の仏教側の排耶論が近代日本における排耶論にどのような形で取り入れられていったのかという点にあるが、本研究ノートではそれを明らかにしていくための必要な基礎的作業として、両書の内容比較を通して、当時(近世初期)の仏教者が特に、一神教の神をどのように理解し、批判したのか、その特徴について考えてみたい。

2. 『破吉利支丹』におけるキリスト教理解

すでに拙稿(加藤 2011)で指摘したように、正三の『破吉利支丹』は、仏身を法身(永遠不滅の真理)と応身(真理の世界から衆生救済のためにこの世に応現した人格身)に分ける大乘仏教の二身論に基づき、「でうす」と「ぜすきりすと」との関係を捉えるところに一つの特徴があるが、後節での雪窓宗崔『対治邪執論』との比較において必要となるため、この点について再び論じることとする。

『破吉利支丹』第一節の冒頭で、正三は天地の創造主としての神について、キリシタン側の主張を次のように説明する。

きりしたんの教えに、でうすと申す大仏、天地の主にして、万、自由の一仏有。是則天地万物の作者なり。此仏、千六百年以前に、南蛮へ出世有て、衆生を済度し給う。其名をぜすきりしと云也。余国に是を知ずして、詮もなき、阿弥陀、釈迦を尊び奉る事、愚痴の至りなりと云ふよし、聞及ぶ。(『全集』p. 131)

ここで、「でうす」は全能の神、すなわち「万 自由の一仏」であり、それが歴史上の人物として、千六百年前に南蛮に「ぜすきりすと」として出世したとするが、この理解は仏教の二身論に依拠したものであることは、同節の最後に、「彼きりしたん宗、本覚真如の一仏有る事を不知して、一仏をかすめ奉り」(『全集』p. 132)とキリシタンを批判するなかで、「本覚真如の一仏」、すなわち法身仏に言及していることから明らかである。

この二身論は仏陀だけでなく、広くは三世諸仏の出現を根拠づけるもので、『法

華経』如来寿量品第十六には、久遠の本仏（本地）とその応現である釈迦（垂迹）の関係が説かれており、この説示は、仏・菩薩が人々を救うために、様々な神のすがたを借りてあらわれたとする、日本で展開した本地垂迹説の典拠の一つとされる。

このように「でうす」と「ぜすきりすと」との関係を二身論的に理解する以上、次のような批判が続いて出てくるのは当然である。

でうす、天地の主にして、国土、万物を作出し給ふならば、何として其、でうす、今まで無量の国々を捨て、出世し給ざるや。天地ひらけてより以来、三世の諸仏、出替ゝ、衆生済度し給ふ事、幾万歳といはんや。其中、終に、余国へでうす出給はで、近比、南蛮計へ出世有と云事、何を証拠とせんや。でうす、天地の主ならば、我作出したる国々を脇仏にとられ、天地開闢より以来、法を弘めさせ、衆生を済度させ給ふ事、大きな油断なり。正しく此でうすは、たはけ仏也。（中略）

彼きりしたん宗、本覚真如の一仏有事を不知して、一仏をかすめ奉り、此国に來り、魔法邪義を弘る科、天罰まぬかるべからず。（『全集』p. 131）

つまり、キリシタンは「でうす」は天地の創造主だと主張するのに、天地開闢以来、「ぜすきりしと」として南蛮に出世するまで応現しなかったことを論難するのである。

続く第二節では、仏教側の立場として、三世諸仏の出現はあくまでも成仏の道を示すものであり、成仏は人が自らの心に向かい、仏性を体得することにしか実現できないとする、「直指人心、見性成仏」を説いた上で、「然るにきりしたん、教ふる処は、実有の見を専として、念慮識情を増長し、天地の作者を造り立て、輪廻の業を重ねて、是を成仏道とおもへり」と批判する。つまり、キリシタンは存在するものを実在と捉え（実有の見）、その根拠として天地の作者までも人格身として実体的に作り出してしまったというのである。（『全集』p. 132）

そして、第三節では、日本にて諸神を敬うのは「でうす」を知らないからだとするキリシタン側の批判に対しては、次のように反論する。

破して云、夫、日本は神国也、神国に生を得て、神明を崇め奉らざらんは、非儀の至りなり。和光同塵は結縁の始、八相成道は、利物の終りと云へり。然ば、まず神を現じ、此国に跡を垂給ふ事は、人の心をやはらげ、真の道入給はん為の方便なり。神と云、仏と云うは唯是水波の隔也。本覚真如の一仏化現して、人の心に応じて済度し給ふ。去ば、神を敬ひ奉る心、彼一仏に報ひ奉るなり。（『全集』p. 132）

神仏を水と波に譬えて、「本覚真如の一仏」が衆生済度のために方便として神の姿であらわれたとする。言うまでもなく、これは仏本神迹の本地垂迹の発想に依拠した主張で当時の現実を正当化するものである。

さて、第四節では、世界の行燈に過ぎない、日月を信仰することへのキリシタン側の批判にたいする反論、第五節では、キリシタンの奇跡信仰への批判を行い、そして第六節で、創造主としての神への批判に戻る。

その前半部で、神の似像として作られた人間にのみ霊を認め（すなわち、畜類には霊を認めず）、人間が死後、生前になした善悪により、神があるものは天国（はらいぞう）につかわし、あるものは地獄（いぬへるぬ）におとすというキリシタンの教説に対して、「畜類と人間の霊を作り分給ふならば、何として人間の霊に悪心を作添て、地獄に落し給ふや。然ば人間を地獄へ落し給ふ事は、偏にでうすの業也」と批判した上で、後半部では、神我諦（永遠不変の精神原理であるブルシャ）により冥諦（物質原理であるブラクリティ）が有為転変し、存在を生み出すという、数論外道（サーンキヤ学派）の学説も仏陀によりすでに論破されているが、天地創造の神についてのキリシタンの教説はそれにも及ばないとする。（『全集』p. 134）

ここで、正三が数論派の学説を出してきたのは、神我諦は永遠不変の實在であるとしても、キリスト教の神のように人格性を持たないからであろう。仏教の法身についてはあくまでも、「一字不説」すなわち、人間の思考、言葉では捉えられないものであり、人格性の具有は、密教的な解釈以外では想定しえないのである。

以上のように、正三は仏教の二身論に基づき、「でうす」と「ぜすきりすと」

との関係を捉え、同じく二身論により批判するという、ある意味、循環論法的な批判であるが、これが可能となるのは、「彼きりしたん宗、本覚真如の一仏有る事を不知して、一仏をかすめ奉り」(『全集』p. 132)と正三自身が述べているように、キリスト教を一種の偽似仏法(偽似仏教)として理解しているからである。この立場をさらに強めたのが、雪窓の『対治邪執論』である。

3. 雪窓宗崔『対治邪執論』におけるキリスト教理解

『対治邪執論』については、大桑齊氏が、その著述の前年に雪窓が行ったキリシタン破斥の説法の記録『興福寺筆記』を発見し、それとの詳細な思想比較を行っていることはよく知られている(大桑 1984)。しかし、本節では『興福寺筆記』から『対治邪執論』に至る思想展開については扱わない。ここでの関心は、最終的には雪窓がどのようにキリシタンの教義を理解し、批判したのかという点にあり、その最晩年の著作である『対治邪執論』のみを考察の対象とする。

さて、すでに、海老沢有道氏が指摘しているように、この書は端的に言えば「キリシトが仏法を学び、ひそかに摂取したものであり、しかも真如常住の理を悟らず、外道に陥ったものだという観念が基底をなしている」(『大系』p. 640)ものである。

具体的に見てみれば、雪窓が「是寸須(ぜずす)釈氏に帰依して名相を学び、みずから邪見を起して外道をなすは必せり」(『大系』p. 462)と述べているように、キリスト教は仏教の外面的理解の上に成り立っているとされる。

その証拠として最勝王経を引用し、その中に見られる「天主教」こそがキリスト教を指すとして、仏説を盗んだ伏線を敷く。そして、

是寸須の人となりや胆大龜心、虚妄巧見。釈氏に帰すといえども、ただその名相を学び、その窮玄に到らず。偽りて釈氏の法相を竊み、還、外道邪見をなす。あるいはその名を改めてその実を執り、あるいはその事同じくしてその理を異にす。(『大系』p. 462)

と述べ、例えば、「梵天王」を「泥鳥須(でうす)」、「諸梵衆」を「安助(あんじょ)」、

「天堂」を「頗羅夷曾（ばらいぞ）」、「地獄」を「因辺婁濃（いんへるの）」、「灌頂」を「婆字低寸茂（ばうてすも）」、「十善戒」を「十の麻駄免徒（まだめんと）」といったように、仏教語を言葉を換え取り入れている例を長々と挙げていく。

その上で、さらに踏み込み、

是寸須竊かに仏法を学ぶと雖も、いまだその玄妙の処に至らず。故に梵天王を取り極則の処となし、その名字を改めて泥鳥須と号し、諸人を繫縛するなり。（中略）寂光土は、これ法身の仏土。無上の学を成ずる者、この土に居す。一にしてすなはち三、三にしてすなはち一、三身の別なきなり。汝、頗羅夷曾、寂光土に超過すと謂ふ。汝の祖、色界の初禪を指して頗羅夷曾と名づく。汝この語に迷ひ、定所ありと謂ふ。請ふ、汝、大憤志を生じ、自己を返照せば、一笑にしてすなはち解すべきなり。（『大系』p. 465）

として、仏教では欲界・色界・無色界の三界のうち、色界の四禪天の初めに置かれるにすぎない初禪天を頗羅夷曾（ばらいぞ）と、その主たる梵天王を泥鳥須（でうす）と名づけ、それらに外的存在性を与えたことを「一にしてすなはち三、三にしてすなはち一、三身の別なきなり」と三身論をもって論難する。

三身論とは先の二身論に過去世における万行の善根功德の「報い」として出現した仏身、すなわち「報身」を加えた論であり、当時としては一般的である。ただし、正三のように仏身論をもってキリシタンの教義を「理解」しようとはしていない。というより、梵天として泥鳥須を位置づける以上、その必要もないのである。キリシタンは「外に向ひて天主を求め」ているからである。雪窓にとっては、仏身論は、あくまでも批判の道具として使われているにすぎず、偽似仏教性の強調は単に仏教の優位性を示すためのものであったと言えよう。

このほか、雪窓は、

泥鳥須、風なくして浪を起し、天地万象を作る。これに加ふるに因辺婁濃を作りて、自己の怨家を作れるを知らず。あにこれ智慧の源と謂ふを得んや。天堂・地獄を造り、苦楽憂喜を生じて、人をしてその苦悩を受けしむ。あに

これを慈悲の源と謂ふを得んや。(中略)

大千界の内に無量国土有り。その中、泥鳥須に帰依する者は、ただ西洋僻地の人民のみ。その余国の日と、徳声を聞かず。(『大系』p.472)

と語り、正三と同様の視点から「天地万物の作者」である「泥鳥須」が、何故、天堂、地獄を造る必要があったのか、また、世界に無量の国土があるのになぜ故、西洋の人々だけが「でうす」を信じたのか、つまり、正三の言葉で言えば「南蛮計へ出世有」ったのかを論難する。

それでは、『破吉利支丹』と比した場合の『対治邪執論』の新しさとは何であろうか。それは、仏説を盗んだキリシタンの邪見の根源として、鈴木正三が着目しなかった点、「天地万物の作者」、すなわち能作者である天主がそのみ無始無終であることができないと考えたところであろう。

天主は、すなわち無始無終にして、万物の始めたりと。すなわちこれ喜利志徒、無始無終に妄執し、天主となす邪見の根源なり。ことを知らず、この無始無終のまさにこれわが大道の元、またこれわが全真の旨なるを。(中略)

喜利志徒、全く、天地万物は自己に備はりて、自己と万物とは無始無終を具足して、本来この一着子なるを知らず、天地万物の外に向かって、一天主ありて独り無始無終を具足すと妄執す。誠に邪見外道たるなり、けだし、万物すでに最初に始生の時あり。すなはち最初始生の前に万物あることなし。すでに万物あることなきときんば、必ずかの時、天主能生の巧また必ず滅あり終あり。以て天主能生の功、滅あり終あるによって故に万物の最初始生の前にあることなきを顕す。(『大系』p.473)

西村玲氏が指摘するように、

天主が世界を創造し維持するものとすれば、天主の存在条件である世界が生まれる前に主体である天主もあり得ないからである。さらに天主が世界事象を生じる「最初始生の時」をもつことは、無始無終であるべき天主の動き

に「間・欠・滅・終」を生じることになる。無始無終の普遍である天主が有始有終の現象的世界を生ずるのは、存在論的矛盾である。（西村 2010a, p. 88）

と言え、雪窓の見識が窺われるところでもある。

4. おわりに

『破吉利支丹』における仏身説にもとづいたキリスト教理解、そしてその批判は非常にわかりやすい。島原での人心の安定に力を注いだ以上、それは当然のことであろう。一方、『対治邪執論』はキリシタン典礼についての説明や「無始無終」の概念を適用しキリスト教の神の存在論的矛盾を突くなど当時としてはかなり高度な内容を含むものとなっている。それは、本書が江戸時代に版行されることはなく、幕府内で秘匿されていたように、元来、限定された読者を想定していたからに他ならない。

こういった排耶書が一気に流れ込んでくるのが明治二十年代の日本であり、反キリスト教の論陣を張った井上円了などの仏教思想家に影響を与えていくこととなるが、この点の考察については次稿に期したい。

略号

『全集』：鈴木鉄心編『鈴木正三道人全集』（山喜房仏書林 1975）

『大系』：海老原有道他校注『日本思想大系 25 キリシタン書 排耶書』（岩波書店 1970）

参考文献

- 海老沢有道（1970）「排耶書の展開」『日本思想大系 25 キリシタン書 排耶書』岩波書店
- 大桑 斉（1984）『史料研究 雪窓宗崔——禪と国家とキリシタン』同朋舎
- 加藤 均（2011）「近世日本における仏教者のキリスト教理解——鈴木正三『破吉利支丹』をめぐる——」『タイ国日本研究国際シンポジウム 2010 論文報告書』、93-104
- 末木文美士（1993）「鈴木正三——人と思想」『日本仏教思想史論考』大蔵出版
- 中村 元（1949）『近世日本における批判的精神の一考察』三省堂
- 西村 玲（2010a）「近世仏教におけるキリシタン批判——雪窓宗崔を中心として——」『日

本思想史学』43, 79-94

西村 玲 (2010b) 「虚空と天主 中国・明末仏教のキリスト教批判」『宗教研究』83-3,
25-45

ヘルマン・オームス (1990) 『徳川イデオロギー』ペリカン社

〈キーワード〉近世日本、排耶書、鈴木正三、雪窓宗崔

Buddhist Monks' Understandings of Christianity in Pre-modern Japan:

Based on the Comparison between Anti-Christian Works of Shosan Suzuki and Sosai Sesso

Hitoshi KATO

The purpose of this paper is to describe how the two representative Buddhist monks in the early Edo period, Shosan Suzuki (1579–1655) and Sosai Sesso (1589–1649), understood and criticized Christianity through a comparison between their anti-Christian works, *Ha-Kirishitan* and *Taiji-Jashuron*.

The first half of this paper explores Shosan's understanding of Christianity based on the two-buddha-body theory. The second half focuses on Sosai's ontological understanding of Christian God.